

あらすじ

第二次世界大戦が終結して、アル、フレッド、ホームーの3人の帰還兵が輸送機に乗り合わせて故郷のブーンシティに帰って来た。

アル(50歳)は、陸軍歩兵連隊曹長として沖縄戦を戦い、復員後は古巣の銀行の副頭取として職を得て復員兵支援の小口融資を担当するが、何の財産も持たない復員兵に無担保で融資したことで同僚役員に白い目で見られる。帰宅した彼は美しい妻ミリー(44歳)とすっかり成長した娘ペギー(23歳)、息子ロブ(17歳)の歓迎を受けるが、戦地に赴いた6年の歳月の空白に戸惑う。

フレッド(30歳)は、陸軍航空隊大尉としてヨーロッパ戦線でB17の爆撃手として活躍し殊勲十字章を受けた英雄。復員後も戦争の悪夢を忘れられずに職を転々としている。出征時に結婚したマリー(28歳)は、夫の精神状態や職を得られない事にいらだち離婚を切り出す。アルの娘ペギーは、苦悩するフレッドに次第に惹かれてフレッドに恋をして苦悩し、妻帯者のフレッドを忘れようとする。

ホームー(24歳)は、空母の一等水兵。乗艦していた空母が撃沈された時に両腕を失って金属製の義手をつけて復員する。高校時代フットボール選手として活躍した彼には出征時に将来を約束した恋人ウィルマがいるが、両腕を失ったホームーは障がいを引きずって復員後に引き籠ってしまい、恋人ウィルマ(24歳)に自分は結婚相手としてふさわしくないと告げる。

戦争で傷つき人生を失った彼らに、
新たな人生は開けるのか？

銀幕の名優たち

作品には、8人の主役がいる？

ウィリアム・ワイラー監督は、これらの登場人物を丁寧に描いて輝かせた



ミリー(マーナ・ロイ)&アル(フレデリック・マーチ)



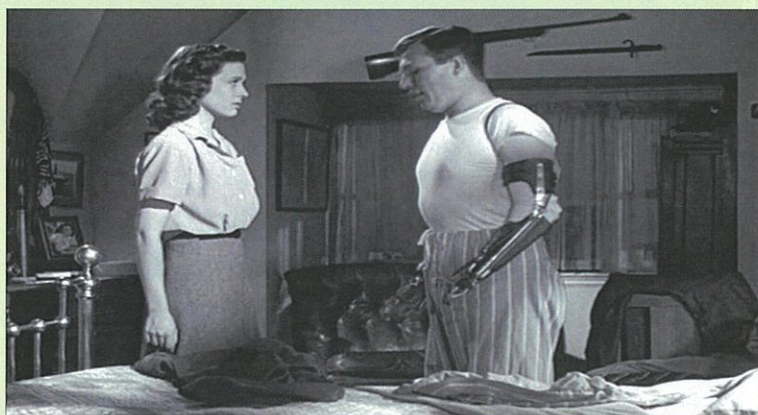
ホームー(ハロルド・ラッセル)
&ブッチ(ボーギー・カーマイケル)



フレッド(ダナ・アンドリュース)
&マリー(ヴァージニア・メイヨ)



ペギー(テレサ・ラッセル)
&フレッド(ダナ・アンドリュース)



ウィルマ(キャシー・オコナー)&ホームー(ハロルド・ラッセル)
ハロルド・ラッセルは、一つの役で2つのオスカーを手にした。

本作品の逸話

①長編映画(2時間52分)だからこそ出来た登場人物の人間味あふれる丁寧な描写

本作品では、8人の登場人物の生き様が丁寧に描かれている。完成度の高い無駄のないセリフと映像は、観る人に深い共感を与えている。「長過ぎるから切れ」という興業側の要求を製作側が蹴ったのも当然である。

②世界中で愛された名作映画

本作は、1946年度アカデミー10部門のうち9部門で受賞。主演男優賞(フレデリック・マーチ)、助演男優賞(ハロルド・ラッセル)、監督賞(ウィリアム・ワイラー)、脚色賞(ロバート・E・シャーウッド)、特別賞(ハロルド・ラッセル)を獲得した。公開後1年で北米では400億円近くの収益を上げ、興行成績としては『風と共に去りぬ』に次ぐ第2位を記録。ロンドンでは一年間満員の状態が続いた。

③俳優を輝かせ登場人物の人間味を引き出したウィリアム・ワイラー監督の演出の凄さ

アルの妻ミリーを演じたマーナ・ロイは、著名な女優。本当にこの映画で出演してくれるか、と製作サイドは心配していた。だが、彼女は快諾。誰でもが憧れる「理想的な妻」を演じた。

フレッドの妻マリーを演じたヴァージニア・メイヨは、私生活では堅実で離婚歴もない。この映画では軽いノリの悪女を演じたが、彼女の演技があればこそペギーの恋心が好ましくない不倫ではなく誠実な恋として描き出すことが出来た。

ホームーの叔父ブッチを演じたボーギー・カーマイケルは、名曲「スターダスト」の作曲者である。本作品では、ピアノの弾き語りをしなが、障がい者として苦悩するホームーに「時が経てばお互いに慣れるさ」と言って慰めている。その語り口はソフトで、障がいを持つ人への思いやりが感じられる。